

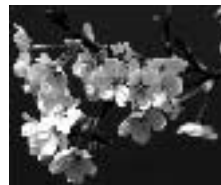
カトリック山形教会報 かすみ

4

2011.4.24

カトリック山形教会

〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590
ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



洗礼志願者の奥さんご家族(写真右)は3月27日、中村さん(写真上)は4月3日に入門式を迎えられ、信者への第一歩を踏み出した。



復活徹夜祭に11人受洗

10人家族の奥さん一家と中村さんに洗礼の秘蹟

今年の洗礼式はとても賑やかになりそうです。子ども8人を含め10人が洗礼の恵みを受ける奥さん家族、そして中村さんに洗礼に向けての喜びの気持ちを聞いてみました。

キリストとともに

プロテスタント系の教会で洗礼に向けて勉強をしていたときの事です。テキストには「パンとワインはキリストの血と体に変わるわけではない。聖変化はない」と記されていました。驚いて牧師に確認しましたが、「書いてある通り」だと言われました。

私は受け入れることができませんでした。ミサでいただく小さなパンをキリストの体と信じる『子供のように』純粋な人たちを知っていたからです。マザー・テレサ、聖フランシスコ、そして聖イグナチオ……。

もし「パンはキリストの体にならない」というのを受け入れたら、精神的な大きな支えを失ってしまう気がしました。

私はミサの中でパンとワインがキリストの血と体になると信じています。2000年以上前のキリストの受難は、私のためであったと信じます。キリストの御聖体を手に取るとき、私にとってキリストの受難は遠い昔の出来事ではなく、もっとも新しい出来事になります。

たぶん、キリストの体を食べ、キリストが私の一部になって初めて、あの日のキリストの死が確かに私の身代わりであったと体が納得できるのです。聖パウロが言っているのは真実です。『わたしはキリストと共に十字架につけられています。キリストがわたしの内に生きておられるのです』。

米沢の殉教者の最後の言葉を深い感動を持って思い浮かべます、『御聖体が賛美されますように』。

(イグナチオ 中村 遼)

喜びの日まで

私が教会に通うキッカケになったのは、母の死でした。母の供養のため独学で仏教の勉強をし、色々な仏教関連の本を読みました。その時に日本の仏教に対しある疑念が湧きおこり、仏教という宗教が信じられなくなりました。その時、私の養父である父に宗教とは何かと相談しました。私の養父というのは、北九州の小倉でそだち、子供の頃に洗礼を受け、洗礼名はヨセフといいます。その父が「一度教会

に行き、神父さんや信者の方々と触れ合ってみなさい、そうすればおのずと自分でわかるから」と言ってくれたので、最初は抵抗がありましたが次男と三男を連れ、去年の8月頃に初めてミサに参加させていただきました。そのミサがキッカケで教会とは何か、キリスト教というのは何か自分なりに勉強をしました。それから数回教会に通い、だんだん自分の中で安らぎを覚える様になりました。ある日のミサ後に本間神父さんとお話をさせていただき、洗礼を受けたい事を伝えました。何度か聖書の勉強をさせていただき家族とも話し合い家族の理解を得て、今回家族全員で洗礼をさずかる事となりました。

私の洗礼名は、高山右近よりいただきました。ユストというのはポルトガル語で正義の人という意味だそうです。妻や子供達の洗礼名も自分なりに悩み考え、聖人や偉人の方よりいただきました。

洗礼式までの日々、感謝の気持ちで楽しみにしています。

(ユスト 奥 孝由紀)

教会報の再出発にあたり

カトリック山形教会主任司祭——本間研二

震災から3日後の3月14日、司祭館の電話のベルが鳴った。少し震える女性の声で「初めて電話する者ですが、神父さんはいですか」「私が神父です」と答えると次のように言った「…自分は今大阪に住んでいる者ですが、多賀城市に住む友達から『地震と津波で家が滅茶苦茶になった。お腹に赤ちゃんのいる私が3歳の娘を抱え三日間避難所にいたが、もう限界!助けて!!』というメールが届いた。

何をどうすれば良いのか思案に暮れ、義母に話したところ『とにかく山形行きのバスに乗せなさい。その後山形教会に電話して助けを求めなさい』と言われた。

義母に言われるままにメールで友に伝え、今この電話をしています。今友達は山形行きのバスに乗っています。助けて下さい」。

話の内容の全ては理解出来ずとも、緊急を要する事態であろうことは十分に察する事が出来たので了解し、山形駅のバスターミナルで見知らぬ二人を探し、薄暗い駅ビルの片隅で、精も根も尽き果てたように立ち尽くす母娘を見つけた。

司祭館で二人の名前を聞き、夫が海上保安官で地震の後、電話で「俺は職場を離れる事が出来ないから、お前たちは大阪の実家に避難しろ」と言われた事。友達にメールをしたら「山形に行けば人が迎えに来るから、その人に頼って!」と言われ

た事などを話してくれた。だが今自分達がなぜ教会に居るのかも良く理解出来ていない状況のようであった。

ヨハネ館に宿泊は出来るとは言うものの、母娘だけでは心細かろうと思い、オタワ会のシスターにお願いしたところ、修道院への受け入れを快く引き受けて下さり、温かな持て成しのもと、避難所で感染したインフルエンザも完治し、日に日に元氣を取り戻し、ようやく航空機のチケットを入手し10日程の滞在の後、実家のある大阪へと帰って行った。

なぜ山形教会に助けを求めて来たのか。答えは電話を掛けて来た女性の義母(夫の両親)が信徒で、被災地から一番近い教会は山形教会だろうとの直感と、教会ならば助けてくれるとの信頼から、嫁に「行け!山形教会へ」との助言を与えたものと知った。

この出来事を通して、私は教会の姿、存在意義を改めて思い知った。教会は教会のためにあるのではない。「教会とは人を思い、人を支え、人と共に歩む、ためにあるのだ」。

「東日本大震災」と言う未曾有の大災害の最中に発行されるカトリック山形教会報「かすみ」が、人と人をつなぎ合わせる真の媒体、心のかけ橋となってくれる事を心から願う次第である。

笑顔でお別れ、2人のシスター

感謝!さようなら!
また会いましょうね!

オタワ愛徳修道女会
Sr.ミシュリン・ウィメット

山形教会の皆様、ありがとうございます!山形教会で皆様を受け入れていただき、一緒に祈ったり、楽しく過ごしました。とても幸せでした。これから、東仙台修道院に移りますが、同じ心で、イエズス様中心に歩んでいきたいです。仙台は近いです。是非おいで下さいね。

山形で過ごした5年間

オタワ愛徳修道女会
Sr.石田弘子

修道生活には、転任はつきものですが、数年かけやっと慣れ親しんだ土地や使徒職から離れざるを得ないというのは、正直言って寂しい思いでいっぱいです。

平成18年3月末に名古屋修道院から転任してまいりました。全く右も左もわか

らず、はじめはまず保育園までの通勤路を覚えることに必死でした。そのうちに新園舎建築が始まり、走りまわっているうちに落成式、入園式等追い立てられる毎日でしたが、その間、ピアス神父様、本間神父様、教会の皆様には本当にお世話になりありがとうございました。

山形で一番心に残っているのは、山形の人たちの素朴さ、温かさ、人の良さです。保育園では、職員に支えられ、保護者の方たち、業者の方たちにもたくさん助けられました。いろいろなことがあり過ぎて、悩み、迷った時も沢山ありました。でもそんな時、不思議と神様は祈りの中や出来事を通して、答えを下さいました。良い方向へと導いて下さいました。神様の働きの不思議さとやさしさにただ感謝したい思います。

どうぞ、これからも皆様、お元気で神様の思いを現す共同体として、歩んでゆかれますように心からお祈りしております。本当にありがとうございました。



Sr.ミシュリンは東仙台へ、Sr.石田は横浜へ派遣されます。新任地での活躍をお祈りします。



四旬節黙想会

「信仰の成熟と老い」

講話 大瀧浩一師

4月17日(日)、山形教会にはおなじみの大瀧神父様をお迎えしての黙想会でしたが、2009年12月の黙想会「聖書にみる信仰のセンス」と、今回の「信仰の成熟と老い」この二つのテーマを引き合いに大変判りやすくお話いただきました。

初めに、この聖週間はキリストの十字架の苦しみへ寄り添う一週間であるように…と始められました。

2011年の年頭の菊地司教様の司牧書簡は「一つの幹に連なる枝として生きる」は教皇様の書簡の中にある信徒の召命ということの中で、「教会こそが交わりの場」というのが底流にあると思われる。前教皇の書簡でも教会を交わりの家、交わりの学校にすること、教会が交わりの連携、交わりの強調となることが神の計

画に忠実にあらうとすることだといわれている。「なぜ」これほど交わりを大切にしなければいけないのか。それはミサの始まりに

主イエス・キリストの恵み 神の愛
聖霊の交わりが みなさんとともに

と、挨拶します。神様の命は交わりの命であり、その交わりが大切なのは私たちが欲しいと思っている永遠の命が、この神さまのいう交わりの命なのである。だから、一人では生きることができない命なのであり私たちの大変な使命である宣教と関わりがある。今、注目されている無縁社会の中で、現代社会にあって教会こそが交わりの場であるように、他者との交わりは枝を結ぶこと、交わりは宣教を生み出す命と同じく祈りなのであると深く強

調している。

次に教区の優先課題についても司牧書簡にある3つについて詳しく話してくださいましたが、途中は割愛して2009年の黙想会と今回の共通する多くの部分は私たちの信仰上の糧として知りおくべきかと対比して記します。(先に「聖書にみる信仰のセンス」→「信仰の成熟と老い」です)

- 司教様の掲げる目標は「信徒の養成とは信仰のセンス」→「信仰の成熟」
- 神の恵みをうけるには土でなければならない。土の器であること→器の霊性
- できないことを引き受けるのが謙遜であり、できることを引き受けないのは謙遜ではない。→謙遜は信仰にとっても大切。人間は土でつくられた器であるが、謙遜を方便として使う。できないことを「はい」といって使命を受けとめることが謙遜である。

- 心の器にはしなやかさが必要である。→器として大切なことは、しなやかさがないといけない。新しい命を入れる器→マリアさまがモデル。

- 魂はどこに宿っているか。皮膚と皮膚を重ねあうところに命が生まれてゆく→命はどこに生まれるか。裸になれることが必要。皮膚と皮膚が重なり合うところ、手と手が触れ合うところに命が生まれる。(マルコ5,21)

最後に

*いつでも空っぽにできないと器の霊性になれない。四旬節は心も体も空っぽにすることに招かれている。(大斎小斎など)
*「老い」は誰にでも与えられる。信仰の成熟にとっても挑戦であり、老いは自分がしたいというところから外に出されるところ。くれない族は老化の始まりである。老いは自分のしたいことをやれない、これをどうやって受け止めるか。

(マリー・ベルナデッタ 工藤 和子)



4月17日(日)、受難の主日(枝の主日)は菊地司教の司式によるミサが捧げられ、多くの信者が枝の祝別を受けました。



昨年11月28日(日)に、菊地司教による聖堂の祝別式が喜びのうちに行われた。

改修され、大震災に耐えた聖堂

耐震工事完了から半年過ぎて ― 信者の声

3月11日(金)午後2時46分、今まで体験したことがない大地震が東北地方を襲った。ここ山形でも被害は少なかったとはいえ、大きな揺れの恐怖を感じた。山形教会の聖堂は地震には強い構造とは聞いていたが、昨年耐震工事を施しておいてよかった…というのが信者の本音ではないだろうか。震災2日後の13日(日)には、交通事情が悪く、集まった信者の数こそ少なかったが、この震災で亡くなられた多くの方々、被災された方々へのミサが捧げられた。また、ヨハネ館には多くの援助物資が信者の皆さんから届けられた。

耐震工事完了から約半年が経ち、さまざまなことが見えてきた聖堂について思いを寄せていただいた。

高齢者にも配慮した 聖堂の改修

教会の改修にはとても助かり、そして、とてもうれしく思っております。一つはスロープと車椅子です。足の不自由な高齢者がいる家庭にはとても心強いです。

二つ目は、地震対策が行われた事です。

消防学校の山形県防災学習館に幾度か行く機会があり、指導者の方から「宮城県には、大きい地震が99%くる」。その影響で山形にも影響がありますよ。とお聞きしていたからです。

この度の東北関東大震災では、改修が終わった後だったので安心しております。神様キレイな教会をありがとうございます。

(小さき花のテレジア 柴田 きみえ)

改修後の 御聖堂^{おみどう}についての想い

今度の東日本を襲った巨大地震と津波は広範な地域に、人的、物的に未曾有の災害をもたらしました。沈痛な思いで一杯です。被災者の方々に心からのお見舞いと神様のご慈悲をお祈り致します。

山形においても地震の恐ろしさを体験し、今も頻繁に続く余震の度に、恐怖感に捕らわれるのは私だけではないと思います。それにつけても、改修された山形教会の御聖堂は、何の被害も見当たらなかった事は本当に幸いでした。

大震災後の主日は3回を数えましたが、

信者の皆さんと共に集まって、ごミサに参加できる喜びを深く味わい心からの感謝を捧げています。

ここで、改修した御聖堂について、私を感じている想いを話させて下さい。

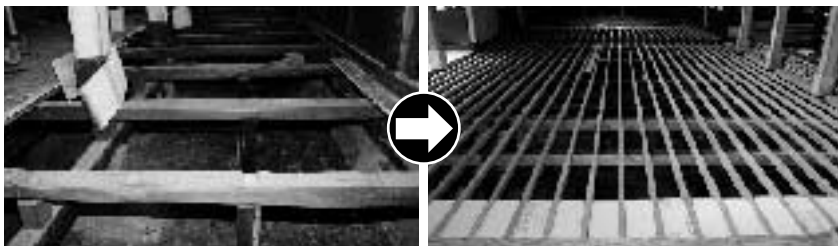
一つ目は耐震構造。建物の安全確保は何と言っても土台基礎がしっかりしている事です。土台基礎が鋼製床束、根太、床補強米松大引、コンクリートや床下地材等によってしっかりと固定され、その上の床面、壁面も構造用合板コンパネ、ラスボード、ナラフロア、床断熱用ポリスチレン、鋳(かすがい)などで補強改修され、建物内部が全体に落着が感じられます。

二つ目は空調設備の導入について、天井、床面、壁面は、ウレタンや断熱用ポリスチレンフォーム等によって厚く覆われて保温性、機密性が増し、更に、内外部の建具改修によって機密性も高く保たれ、隙間風が入らなくなり保温効率が格段に上がって快適になり、安心して祈りが出来る雰囲気があります。

三つ目は、祭壇の改修によって祈りを捧げる雰囲気が高まった事。祭壇正面のスタンドグラス、そこから入る色彩豊かな



外観をほとんど変えることなく耐震工事が施された聖堂



床部分の補強工事。左が工事前の写真で歩くと床がきしんでいた。右は補強後の写真。土台から浮いていた柱も含め補強が施された。同じように壁面や天井にも耐震補強工事が行われた。

な光は聖霊降臨の秘儀を強く印象づけ、又、中心の十字架像の両側面から差す淡い光は、十字架が御聖堂の中心である事を強調しています。

以上のように今回の改修工事は当を得たもので本当に良かったと強く感じているこの頃です。

(洗礼者ヨハネ 沼沢 忠一)

改修後の聖堂の印象

昨年山形教会が新しく生まれ変わりました。耐震性に優れ、冷暖房設備もより充実し、内装も明るくなり、入口には、バリ

アフリーを導入するなど、以前よりも高齢者や障害者のある方などにも優しい造りになったと思います。しかし、新しくなったことで、全体的に少し狭くなり、こじんまりとした感じがします。

私は幼い頃から山形教会に通い、古い教会に愛着と親しみを持っていました。教会のもつ空間と雰囲気は特別なもので、私にとって心の落ち着きを持てる場所でした。新しくすることで、いい面が増える一方で今まであったいいものがなくなるのは残念なことだと思います。

山形教会は長い時代を経て、現存し



聖堂正面には聖霊が降りてくるイメージのステンドグラスから柔らかい光が差し込む。



3月20日(日)ミサ後に、車椅子介助研修会が行われ、聖堂内や入口、スロープなどで車椅子を用い、移動と介助を体験した。

てきました。これも今まで山形教会にいた信者さん方が信仰を受け継ぎ、教会を大切に想う気持ちがあったからだと思います。私たちもこれから、受け継がれてきた信仰と教会に対する気持ちを大切にしていきたいと思います。

(ニコラオ 小笠原 翼)

皆と一緒に祈る 一番安心な場所

大地震はとても怖かったです。避難場所は第一小だけど、私は教会に来るつもりでした。私たちの教会はちゃんと耐震工事ができたし、ここで神様に皆と一緒に祈りしてるのが一番安心です。聖堂の改修工事をして、本当によかったですね。改修は、神様が後押ししておられたんだと思います。神様のお望み、み旨だったんですね。神父様は、長い間、本当に苦しまれたけど、神様のために、皆のために、よく耐えて、やって下さったと感謝しているんですよ。私たち、小さい声だけど、そう思っている人は多いんです。

これから、山形教会に被災した方たちが来られるでしょうね。私たちは、幸いにも皆無事だったし、何と言っても教会があるので、ここに避難してこられる方を暖かく迎えましょうね。私は年をとって、力がないけど、お祈りすることと、受け入れることはできるので、していきます。

(一信徒)

新庄教会から

新庄教会で 初めての洗礼式



よく整えてくださる神様が、二人のマリアの前途を豊かに祝福して下さっているような、何とも頼もしい感じでした。

洗礼式のドレス、可愛らしいですね。このドレスには、新庄教会信徒の愛と信仰がいっぱい込められています。信徒がドレスを縫いました。新庄教会の子どもグループの長女Hさんをはじめとして、女の子たちが、花や蝶々のスパンコールを縫い付けて、可愛らしく飾

り付けました。また、Hさんのお母様のウエディング・ドレスの一部もきれいな飾りになっていました。一人ひとりが、大切なものを持ち寄って、洗礼のために奉仕します。本当に“温か〜い新庄教会”です。

4月3日(四旬節第四主日)、新庄教会のミサにおいて、1歳の双子の女兒が幼児洗礼の恵みをいただきました。洗礼名は二人ともマリアです。この子たちは、3月11日の大地震で被災し、ご両親、姉兄、フィリピンからの訪問中のお祖母様と新庄教会に一時宿泊していました。避難生活という大変な状況の中での幼児洗礼です。私たちの主イエス様の御降誕、そしてエジプトへの避難を思い起こさせられました。本人だけでなく、御家族と周囲の人たちにとって、何か深い意味が隠されているように思えました。フィリピン人の母親は、とても喜び、「よかったー、神様の子もです」と安心そうな表情で言っておられました。日本人の父親も、ちょっと緊張気味だけど、優しい感じで、娘を抱っこしておられました。代母は6人いました。そのうち、一人が日本人、他の5人はフィリピン人です。全てを

ミサのために、山形教会のオルガニストも奉仕してくださいました。ありがとうございます。やっぱり、姉妹教会ですね。オルガン伴奏で、少しずつ、典礼聖歌を練習し、歌っています。今日は、新庄教会の信徒Sさんが答唱詩編の詩編をソロで祈り歌いました。初めてでした。Sさんは、もちろん緊張しましたが、神様の大事なメッセージをしっかりと伝えてくださいました。

全てよかった!姉妹教会の新庄教会のために、心を一つにしてお祈りしましょう。そして、共に、主イエスの道を歩んで行きましょう。

(Sr.築沢 由美栄)

特別な思いで過ごした四旬節

復活祭を迎えるまでの四旬節は、これまでも特別な期間として捉えていましたが、今年の四旬節はさらに特別な気持ちで過ごすことになりました。

「祈り、節制、愛の行い」を求められるこの期間に、悪夢のような東日本大震災が起こりました。連日映し出されるテレビ画面を前に、いま自分に何ができるだろうかと思ひながら、何もできずにいるなか、真っ先に行動を起こしたのは二番目の娘でした。地震の影響で学校が臨時休校となり、自宅待機にもかかわらず友人

ら5人と募金活動をやると言いだし、親としては何かあってはと反対するの聞かず、彼女たちの意志は固く「今、自分ができることをやる」と出かけて行きました。我が家ではおとなしく、一番頼りない娘ですが、一度決めたら曲げない意志だけは小さい頃から持っているようです。

スーパーの店長に許可をいただき店頭で6時間募金を呼びかけ、収益金を新聞社に持ち込んだあと帰宅し「みんなが募金をしてくれて嬉しかった」と笑顔で報告する娘に、ただただ頭がさがりました。

普段の何でもない普通の生活がどれだけありがたいかをこの期間に再確認する機会を与えられました。多くの物資や燃料が不足するなか、節制に努め、避難者がある近所の方へ灯油を分け、亡くなられた方や被災者のために祈るなど。他人のために自分にできることは何かを考え、行動する。すなわち「祈り、節制、愛の行い」をこれまでの漠然としたものではなく、実際に行うことになった今までにない特別な四旬節になりました。

(ヨハネ 小林 雅人)